

コラム 21 日露戦争における日本の武士道精神

<上村彦之丞の武士道精神>

1904(明治 37)年 8 月 14 日、第 2 艦隊司令官である上村彦之丞提督(写真)は、蔚山沖でウラジオ艦隊(リューリック、グロモボイ、ロシア)を捕捉し、双方の激しい海戦の末、巡洋艦リューリックを撃沈、ほか 2 隻を大破させました。日本にとって、ウラジオ艦隊は、陸兵の乗った常陸丸などを撃沈した恨みのある艦隊でありました。しかし、ロシア兵 600 余人が、海に投げ出されたのを見た上村司令官は、「彼らを全員救助せよ!」と命じ、救助されたロシア兵は、皆、涙を流して喜んだといひます。

また、上村司令官は、救助したロシア兵に対し、部下が復讐の念をもって虐待行為をしないよう、各艦に「捕虜を厚遇せよ」と重ねて命じます。そして、参謀の佐藤鉄太郎中佐に現場を見に行かせます。佐藤中佐が捕虜の現場に行くと、負傷して横たわるロシア兵に対して日本の水兵達が、真夏の猛暑の中で、周りを取り囲み扇子を開いてあおいでおり、佐藤参謀に水兵が「こいつらは憎い奴ですが、こうなったらかわいそうです」と労わっていました。この状況報告を受け、上村は心から安心して喜んだといひます。

これまで西洋諸国にはできなかったことを、日本が実践して示し、世界は武士道の鑑として、賞賛を惜しまなかつたのであります。

このときの状況を歌った軍歌「上村将軍」は、長く日本海軍将兵に愛唱されました。

【軍歌：上村将軍(抜粋)】

3 番：蔚山沖の雲晴れて	英雄の腸ちぎれけん
勝ち誇りたる追撃に	「救助」と君は叫びけり
艦隊勇み帰る時	折しも起る軍楽の
身を沈め行くリューリック	響きと共に永久に
恨みは深き敵なれど	高きは君の功なり
捨てなば死せん彼等なり	匂ふは君の誉れなり

<乃木希典の武士道精神>

日露戦争における乃木希典(写真)の武士道精神は、当時戦争が終わって、世界から絶賛されました。乃木大将はその人柄が誠実であること、清廉であること、質素であること、勇敢であること、において他に抜きん出ておりました。そして、同じ長州人である児玉源太郎大将に、詩人乃



乃木希典陸軍大将

木といわせる程に文学的素養の高い将軍でありました。また、乃木は夫婦、親子、兄弟、家族、及び君主との絆の重要性を強調した、山鹿流の武士道観に学んだ吉田松陰の影響を強く受け継いでいました。特に、吉田松陰の人間的優しさが乃木の人柄に強い刻印を与えたといわれております。乃木は2人の男子を設けましたが、2人共日露戦争で亡くしています。こういった意味においてロシア軍は大事な我が子をも殺した憎むべき相手であります。12月5日、203高地を占領し、ロシア旅順艦隊を壊滅させた翌年の1月2日、敵将ステッセルと水師営で会見（写真）が行われました。この時世界中から、多くの報道関係者が集まり、この会見取材しようとしてきました。乃木将軍はこの



水師営の会見

取材に対し、敵将ステッセルに、恥をかかせてはならないと一斉の取材を断りました。しかしながら、せめて写真だけでもとらせてくれとせがむ報道陣に対し、それでは仕方がないと言って、ステッセル以下幕僚に帯剣をさせ、対等意識のもとに写真をとらせました。この「水師営の会見」はやがて小学校の唱歌として「昨日の敵は今日の友」という歌い出しではじまり、長く日本人に愛されました。そして、ステッセルはその後ロシアに帰りますが、ロシア政府は敗軍の将となったステッセルに銃殺刑を言いわたしました。

これを聞いた乃木将軍は敵将の勇敢を称え、ニコライ皇帝に敵将ながら勇敢に戦ったことを記した助命嘆願の手紙を出しました。その結果、ステッセルは、死を免れてシベリアへの流刑に減刑されました。さらに、銃殺刑を免れた敵将ステッセルの家族に対し、ロシア政府は極めて冷遇するわけですが、乃木大將はこの家族へ、明治天皇崩御に際し、自らが自決するその時まで、生活費を送り続けました。世界の戦史上、このようなことは乃木大將以外に例がないのであります。